

口語詩句奨学生 総評

暮田真名

まずは奨学生に選ばれた方々に、おめでとうございます。

私は今年から選考に加わったため、例年と比較して作品傾向を語ることができない。そこで、奨学生の作品を引きながら当奨学生の応募規定である「口語詩句」について考えることで代えたい。議論に資するところがあれば幸いだ。

「顔ない」と「横転」。昨年「X」で初めて目にし、強い忌避感を覚えた二つの言葉だ。特に「顔ない」に対しては「こんな言葉を使っていたら日本語が貧しくなる」と寒々しい気持ちになった。そうした自分の反応は、「今年の新語2016」（もう10年経とうとしている！）で2位にランクインした「エモい」という言葉に対する年長者たちの過敏にも見えた反応をそっくりそのままなぞっているようだった。

「エモい」にはなんら反発を感じなかった、日常の語彙に取り入れさえした私が、去年あらわれた言葉にこれほどまでに嫌悪感を抱いている。自分がXという〈口語-書き言葉〉空間を牽引する層ではなくなったということがはっきりとわかった瞬間だった。

最初にXの話をしたのは、いくら「口語」とはいえ「詩句」である以上は〈口語-話し言葉〉ではなく〈口語-書き言葉〉だからだ。もちろん、詩歌における〈口語-書き言葉〉とSNSにおける〈口語-書き言葉〉は同じではない。ただ、「口語詩句投稿サイト72h」は場の性質上二者の重なる部分にあるだろう。口語は口語である限り「エモい」-「顔ない」圏の言葉であることを——つまり、「あたらしい人々」には諸手を挙げて消費され、「ふるい人々」には眉を顰められ、ものすごい速さで廃れ、顧みられなくなる言葉であることを——逃れられない。

恋バナはいじめみたいで鳥兜

金光舞

新しい校歌二番に「タワマン」と
入れるかどうか揉めている村
マズルカ

「恋バナ」は「恋の話」の略語、「タワマン」は「タワーマンション」の略語。

一句目、「全員が他者に恋愛的惹かれを体験する」という前提も、「全員が異性愛者である」という前提も過去のものとなつたいま、「いじめみたい」は率直な比喩だ。

「タワマン」と「村」という言葉が並んでいるだけで、「再開発」「立ち退き」「日照権」といった連想が次々と浮かぶ。軽い書きぶりでも、描かれている現実はシビアである。

千年に一度の女の子のとなりの
女の子が飼っているサワガニ
汐見りら

数学と別れて水羊羹を切る
azusa

「千年に一度の女の子」は女優・橋本環奈がかつて「1000年に1人の逸材」と騒がれたことを踏まえているだろうし、「水羊羹」は宮口幸治『ケーキの切れない非行少年たち』をうつすらと想起させる。

「千年に一度の女の子」ではなく「となりの女の子」でもなく「サワガニ」にフォーカスを当てて終わるのは、日の当たらないところにいるものに視線を合わせ続けるという態度表明だ。

二句目、一つの句の中に「別れる」「切れる」という似たような意味の動詞が二つ並んでいるところがおもしろい。「水羊羹」の句跨りはあの小豆色の四角柱そのもの。

メルカリで離婚届を売る 秋刀魚
ムクロジ

マクドナルドの空の壁紙水温む
奥井健太

ハロウインのように
顔の無いヒマワリ
波野梅雨

「メルカリ」「マクドナルド」「ハロウイン」。固有名詞にまつわるイメージが目まぐるしく変化する状況では、読者の中に結ぶ像をコントロールすることも至難の業だ。

実際、「役所にとりに行く時間がない」「周囲に知られたくない」などの理由でメルカリで離婚届を買う人はいるらしい。メルカリが登場した2013年、こうした未来は予想できただろうか。

二句目、飲食チェーンの水と地球をめぐる水の対比。後者のほうがバーチャルで、前者のほうがリアルだというねじれた感覚に、同時代の詩だと感じた。

三句目、ハロワインといえば「おばけ」「カボチャ」だが、「コスプレ」「軽トラ」も無視できない。これはどちらの「ハロワイン」だろう。

売名のための復縁きぬかつぎ

大西美優

水仙の咲けば出るところに出ます

松下誠一

「売名」、「出るところに出る」もコノテーションを豊かに含んだ言葉である。

「復縁」というきわめてプライベートな出来事に「売名」というレッテルが貼られる。恋愛リアリティーショー的感性から目を逸らさずに書いている。

「出るところに出る」は公的機関に訴える際の常套句。一輪の花ですら刑事事件と無縁でいられないという、半ば強迫観念のようなひりひりとした感覚。

ここまで込み入った調べものをすることもなく一つ一つの作品を読んできたが、百年後の読者はそうもいかない。私のように直感的に読み解くことは難しいだろう。簡単に言えば「百年後の読者には伝わらない」ということである。口語とは〈時代に拘束された言葉〉だ。

これは決して「伝わらないから悪い」「不自由だから悪い」という単純な話ではない。

「自分の書くものが立場の違う他者に全く伝わらない」という事態を想像して初めて、「わたし」と「あなた」という〈始点にして終点の伝わらなさ〉に向き合うことができる。

外的な制約が「自分」という牢獄から救ってくれるという体験は、短歌、俳句、川柳といった定型詩に取り組んだことのある人間なら多少なりとも身に覚えがあるはずだ。「音数が決まっているからこそ自由」というのは矛盾しているようで、そもそも人間が「時代」「環境」「言語」といった制約にまみれた存在であることを「音数」の制約が相対化してくれるのだと考えれば不思議はない。もっとも、文字数、行数の苛烈な制限がある72hの作品投稿フォームの上では、自由詩を書いていても事情は同じだろう。

「わかる人にだけわかればいい」と内輪の殻に閉じこもる心と、「万人に伝わる言葉を」とありもしない普遍を夢想する心のあいだで、時代とわたりあう言葉を鍛える場として〈口語詩句〉をともに書いていきましょう。

ここまで触れなかった作者の作品を一つずつ引用して終える。

ゆめの泉に

ゆめの鶯鳥をなげいれて

金・銀・鉄の鶯鳥をもらう

早瀬はづき

体操着

ぬげた人から飛び降りる

名前のワッペンだけを握って

雲理そら

白菊を挿すほどに瓶括れゆく

福山ろか

うさぎの名

まよいつつ見る春の雲

さいう

われわれの声帯模写をする羊

高田皓輔

心臓が鬼燈になるちょっと泣く

齋藤栄